コマ・独楽・こま

八木田宜子

女ならだれだって、「女って損だわ」と思ったことが一度はあるに違いない。わたしなんか、数えきれないほどあるけれど、現在、「ああ、損だった！」とつくづく感じることは、小さい時コマ遊びをしなかったことである。わたしの幼い頃は、男の子の遊びと女の子の遊びが、ハッキリ分かれていたのだ。

わたしは三〇過ぎてから、コマの魅力にとりつかれた。はじめは、小さいひねりゴマ（指先でひねってまわすコマ）であった。自分が力を与えたコマがまわっている。それをじーっと見ていると、まるでコマは生きているようで、自分がまわしてやったオモチャとは思えない。そして、止まる時の、いかにも未練げなようす。止まったとたんに、すぐ又まわしてやりたい気持になってしまう。

その次に夢中になったのは、ひもをまいてまわすコマであった。なにしろ、小さい時まわした経験がない上、生まれついての不器用ときているから、なかなかうまくいかない。それでも、コツというのはあるもので、それをのみこんだとたん、ズグリや大山ゴマ（いずれも、まわしやすい木ゴマ）程度は、簡単にまわせるようになった。

もみゴマの場合は、二、三歳の幼児にもまわせるほど、まわし方が簡単だから、まわした結果しか心にとまらないが、大きなコマになると、「まわしたあ！」という実感は

大きい。するするとほどけていくひもを、さいごにキュッと引く。すると、コマは勢いよくまわりだす。その手ごたえが心地よくて、一時は家の者があきれるくらいやった。

ああ、男の連中は、小学校の低学年からこの手ごたえを感じ、しかも、何人かで集まっては、火花を散らしてのコマの戦い。いいなあ、と、ジェラシーを感じるのであります。学校では、トバク的行為が何のと言うけれど、とった、とられたの、どこが悪い、人生そのものではないか――と、このへんまで友人に話したら、言われてしまった。

「あんたの息子はどうなの？」

そこなのです、問題は。

わたしがコマに魅入れられたのは、ちょうど息子がよちよち歩きの頃の、その後、我家のコマの数は加速度的にふえつづけた。自由にさわらせたので、息子はコマで遊んで大きくなった。しかし、しかしである。息子は友達とコマで遊ばない。だいたい集団で遊ぼうというふんいきがほとんどない上、コマをまわせる子は小学校のクラスで一人か二人だという。あんたがみんなをさそったら？　と言ったら、子供の遊びに親が口を出すものではないと、おこられてしまった。そのくせ、自分だけのコマの箱をもっているし、わたしと一緒に「コマの会」（コマを愛する大人の趣味の会）に出かけるし、お客さんが来ると、母親がお茶を入れているあいだに、めずらしいコマのまわし方を説明して、間をもたせたりしている。子供というより、まるで大人の趣味人のような態度。

このごろの男の子は、わたしのジェラシーの対象にはならないようである。さて、わたしのコマ狂いはエスカレートし、今度、とうとう本を書くことにまでなってしまった。そのカラーページに、小学生がコマをまわしている写真をのせたいと思ったが、まわせる子がなかなか見つからない。いろいろさがして、S家の男の子二人がいい、ということになった。我家の息子の小学校時代の同級生の女の子の弟――という、ややこしい関係である。S家では、お父さんが、男の子はコマぐらいまわせないといけないと言って、一緒にコマを買いに行き、庭でまわし方を教えたという。この子たちは私立の小学校にかよっており、その小学校は、ふつうの公立校と違って、遊び道具を学校にもっていっていいのだそうだ。S家兄弟の影響で、学校ではコマが大いにはやっているという。まわさせてみると、あまり上手ではないが、「趣味人」めいた我が息子とは違い、

毎日集団でまわしていることが、よくわかる。

それにしても、人類とともに歩んできたような古いおもちゃ、コマ。これからはどういう運命をたどるのだろうか。

もうすぐお正月。俗に、コマはお正月の遊びとなっている。昔がき大将だったお父さん方、駄菓子屋でもデパートでもいいから、とにかくコマ（なるべくひもでまわすもの）を買って、子供といっしょにまわしてみていただけませんか。そこから、何か生まれるかもしれません。

（作家）